

単騎シベリア横断「福島安正」

JJ1SXA/池

欧米人を驚嘆させた快挙「単騎シベリア横断」を達成したのは、時の陸軍情報将校「福島安正」です。

日本には、南極探検の「白瀬矗」や、ずっと年月を経て、太平洋ひとりぼっちの「堀江謙一」や北極圏 12000km の犬ぞり探検の「植村直己」等、世界に名を轟かせた探検家はいますが、明治の御世での決死の快挙です。

明治 25 年 2 月 11 日、ベルリンを出発し、ペテルブルグを経てモスクワに至り、ウラル山脈を抜け、アルタイ山脈を越えて外蒙古に入り、再びロシア領に戻り、更にバイカル湖に出て、これより最極寒期のシベリア奥地へと進む、その後は満州に入りチチハル、吉林を経て明治 26 年 6 月 12 日ウラジオストックに至る、総日数 488 日、全行程 14000 キロという壮大な偵察旅行であった。

その真の目的は、予測される日露戦争(実際十余年後勃発)に備えての偵察であった、然しシベリア偵察が必要とはいえ、福島は日本陸軍の将校である、ロシアがそれを許すはずもない、そこで福島は、あくまでも一個人の冒険旅行という形を採り、「ヨーロッパとアジアを西から東へ、たった一人騎馬で横断すること」、「極寒期にシベリアを横断すること」の二点を冒険の目玉として掲げたのである。(零下 50 度、氷雪のシベリア踏破は絶対に不可能と考えられていた)

福島は語学に堪能で、英仏独支露の五カ国語をものにし、会話だけなら更に数カ国語を操ったとのことですが、明治の初期のこと、驚嘆すべき大英才だった。

このシベリア横断よりも前の、明治 12 年、福島は古びた支那服を纏って支那人になりすまし、約 5 ヶ月間、清国偵察を行い、「隣邦兵備略」に纏め報告している。…「清国の一大弱点は公然たる賄賂の流行であり、これが百悪の根源をなしている。しかし清国人はそれを少しも反省していない。上は皇帝、大臣より、下は一兵卒まで官品の横領、横流しを平然と行ない、贈収賄をやらない者は一人もいない。これは清国のみならず古来より一貫して変わらない歴代支那の不治の病である。このような国は日本がともに手を取ってゆける相手ではありえない。」…となっている。

130 年前の福島の支那報告は、そっくりそのまま、現在の中国共産党体制下の中国に当てはまるのでは無いか？

今、中国は、東シナ海周辺海域に防空識別圏を設定し、これを公表したが、今回の設定空域は日本の他、韓国、台湾の防空識別圏の一部も含み、結果として、3 カ国・地域と防空識別圏が重なり合う状態になっており、これは、国際法上の一般規則である公海上空の飛行の自由をも不当に侵害するものである、こんな横暴を平気で繰り返す中国、130 年前福島が報告した、「…日本がともに手を取ってゆける相手ではありえない…」と言う言葉を思い起こすべきでしょう。(28,Nov,2013 記)